

トレーニー 派遣渡航記 1日目

私たちのトレーニー 派遣は、富山空港にて4大学の結団式から始まった。北陸銀行様からのプログラムに向けたお話、それぞれの大学の代表挨拶を通して、これから始まる中国大連にての3泊4日に胸が膨らむと同時に、プレッシャーを感じながら飛行機へと搭乗したのを強く覚えている。

約3時間ほどのフライトを終え私たちは大連の地へ足を踏み入れたわけだが、機内から見た大連や実際にバスの車窓から眺めた景色は私が思い浮かべる中国のイメージとは大きく異なるものであった。空は青く一切の雲も無い快晴で、大気汚染の固定観念はすぐに消え去るだけでなく、多くの高層ビル群や交通の激しさに中国の急激な経済発展の姿が現れており非常に印象的だった。大連へ降り立つ以前から中国については調べていたためこの国を知っているつもりではあったが、その考えやステレオタイプがただの足かせに過ぎないものであるのだと感じた瞬間であったように思う。大連展望台から眺めた街の美しさは日本人として悔しい気持ちもあり、中国の勢いに日本経済が劣る国際事情を目の当たりにした気がする。

その後、私たちは北陸銀行大連事務所の清水所長から中国という国の力、その理由と経済のフローについて説明を受けたわけだが、中国の発展力はその行動力にあるという言葉が強く私の胸に刺さり、私に足りないものはそういった力なのだなというように思った。問題に対して、効果的な政策を思考し即刻で実行に移る。中国という国はそれに長けているのだという事実を間に受け、日本の弱さ、すなわち日本人としてまだ国際的に足りない部分や吸収すべき点はなんなのか深く考えることができた時間になった。

北陸銀行清水所長のセミナーを終えて、中華料理をディナーとしていただく機会を得た。初めての本場の中華料理に思いがけずたくさん頬張ってしまい、久々にお腹一杯になったのを思い出すと、よほど美味なものだったのだなと感じる。最後に参加者全員のプログラムに対する志を聞くこともでき、残りの三日間へ身が引き締まる思いで一日目を終えた。



(←大連市内の様子)

大連トレーニー研修

渡航記 1 日目 (2019 年 3 月 13 日)

出発当日、金沢は悪天候のため雨に濡れながらスーツケースを引いて大学付近の集合場所へと向かった。富山空港に到着した後、空港内の会議室にて 4 大学（金沢大学、富山大学、富山県立大学、北陸先端科学技術大学院大学）合同オリエンテーションを行った。各大学の学生代表挨拶を聞きながら自分の目標を再確認するとともに、志の高い仲間たちと過ごす研修に期待で胸が高まった。その後飛行機で大連へと向かったが、到着間際の窓から見た景色は予想外にも高層ビルが立ち並ぶ都会の風景だった。悪天候だった金沢と対照的に、大連は快晴で気持ちがよく、PM2.5 等も感じなかった。飛行機が予定より早く到着したため、バスで街中を車窓観光もできた。



それから大連市内、森ビルにある北陸銀行大連事務所で清水所長による現地事情セミナーを受けた。事前課題で大連市のことについて調べていたが、現地の最新情報から様々なことを学べた。特に印象深かったことは、中国のスピード感である。近年の急激な経済成長を経て、最近 10 年の中国 GDP 成長率が減少傾向にあり伸び率が鈍化している。このゆるやかな減速を内需拡大と個人所得税減税効果等で補う等 2019 年を見通し、早速対応しているスピード感を日本も参考にすべきではないかと考えた。

セミナーの後、森ビル付近のホテルにチェックインをして、夕食会場へと向かった。東北料理を食べながら、自己紹介と意気込みなどを発表し合った。夕食後、市内の夜景を観光したが、街中ライトアップしており、きらきら輝いていた。空気や街の風景から、中国へのイメージが大きく変わった 1 日目であった。



文：人間社会学域経済学類 2 年 知花 望笑

渡航記 2 日目 3 月 14 日(木)

この日は朝から 2 社の企業視察を行った。

企業視察 1 社目の YKK 株式会社（大連吉田拉鍵有限公司）では、この企業全体の特徴とも言える一貫生産体制を大連工場でも実現しており、ファスナーの生産から染料の調合に至るまでをすべて同一工場内で行っていた。視察で印象に残ったことが大きく 2 点ある。1 点目は生産性向上への取り組みだ。まず、人員を削るために、製品を次工程へ自動で送るラインや不良品を画像認証で識別するシステムなどが導入され、工場全体として自動化が行われていることがわかった。また、工場内で表彰されている人を掲示するなどして人員のモチベーション向上を図っているなど全体として生産性を向上させる工夫が見られた。2 点目は、徹底した現地化である。「土地っ子になれ」という理念のもと、現地の企業や工場で勤める従業員と緻密なコミュニケーションを取ることを重要視しており、企業の海外展開においては良い商品を提供することだけではなく、その土地の人々の理解を得ることも重要であるということがわかった。

企業視察 2 社目のコマツ NTC 株式会社（億達日平機床有限公司）は、中国企業との合弁会社として設立され、自動車のエンジン部分などの生産を行っていた。生産ラインでは大型の機械を用いた作業があるため、事故のリスクを最小化するために、危険予測訓練の実施や事故防止を促す掲示など徹底した安全教育が行われていることがわかった。また、性能やコストに対する考え方が日本と比べ複雑であり、そうしたニーズを汲み取ることが難しいということ、中国では意思決定のスピードがとにかく速いということなど現場を経験している方々でなければわからない貴重なお話を聞くことができた。

企業視察の後、市内の観光地をまわった。その際、現地の生活を実感できるようにと地下鉄に乗った。入場口には持ち物検査をする所があり、危機管理が徹底されていると感じた。地下鉄の駅から地上に出ることなく様々な店舗が並ぶ通りにつながり、とても賑わった様子が見られた。店員は接客、集客に集中しているわけではなく、携帯をいじったり、食事をとったりと気ままな振る舞いをしていた。特に嫌な感じはせず、あるべき接客とは何なのか考えさせられた。

夕食に餃子料理をいただき、二日目の最後に中国雑伎を鑑賞した。圧倒的なパフォーマンスに研修団全員感動した様子であった。常人には真似できない自由な身体性を目の当たりにし、経済の発展、社会貢献、グローバル人材など研修中、眼前に迫ってくる現実に先行して身体があり、大きなことを考える前に身の回りのことを大切にすることが必要であるし、ないがしろにしてはいけないのだと気づくきっかけになった。



文：人間社会学域経済学類 3 年 田中 智晃、人間社会学域人文学類 2 年 相田 悠真

トレーニー派遣（3日目）3月15日（金）

研修3日目は、私服での活動となった。1日目、2日目とは大きく異なり、同年代の学生という同じ立場で交流をすることができる良い機会であった。私たちはこの日を非常に心待ちにしていた。大学に到着し、はじめに各代表のあいさつや、記念撮影を行い、その後日



本人学生3人、中国人学生3人というようなグループ構成で交流が始まった。私たちのグループでは、自己紹介を1人ずつ行った後、準備してきたそれぞれの国の人気のあるお菓子やジュース、大学のグッズなどを贈り合った。お互いのプレゼントでいっぱいになり、自然と笑顔が溢れた。交流の中では、主に大学生活について、お互いの国のイメージについて、今流行っていることについてなど、バラエ

ティに富んだ話題があがった。その中で特に印象に残っていることが2つある。1つ目は、大学生活に大きな違いがあったことだ。大連理工大学の学生は、ほとんどが寮生活をしており、私たち日本人学生が大半行っているアルバイトは、中国の学生はしないということである。その理由は、勉強が大変だということ以上に、賃金の格差にあった。「1時間働いても日本円で200円くらいだから、時間の無駄だ」と聞いたとき

は大変驚いた。だが、中国人学生3人中2人は日本で半年以上の留学経験があり、日本のコンビニでアルバイトの経験があると話す学生もいた。経済的に発展し続ける中国ではあるが、学生という立場で考えると、これほど恵まれた環境で働けるというのは日本の良さでもあるのかな、と思った。もう1つ



印象的だったことは、お互いの国のイメージを話した時だ。私が日本や日本に対するイメージ、また、日本を訪れた時の印象を聞くと、日本に対して特に若者は非常に好印象を持っていると話してくれた。メディアでは日中関係が問題にあげられているが、こうして私たち若者がさらに交流を図り、将来的には良きビジネスパートナーとなれるよう努力していきたいと思った。交流の後は、グループごとに食堂へ行き、昼食をとった。日本の大学と違って順番に並ぶという制度はなく、たくさん並ぶ料理の中で自由に欲しいものを言い、お皿に盛



ってもらおうというスタイルであった。慣れていない私たちは、どうしても中国人学生のスピードについていけず、料理を全てとるのに大変苦労したが、グループの学生のサポートのおかげで料理を取り終え、楽しく食事をすることができた。その後は、自由に学校内を散策した。日本の大学と違い、大学の敷地内にドラッグストアや洋服屋、スーパーや果物屋が並び、学校外に出なくても生活が十

分にできるようになっていた。私たちは、おすすめのタピオカ屋さんにも連れてってもらい、

おいしいタピオカミルクティーをごちそうしてもらった。3日目は少し冷え込んだこともあり、そのあたたかさが心に染みた。非常に短い時間の交流であつという間に時間が過ぎ、最後お別れをするのが辛かった。連絡先を交換し、必ずまた再会すると約束をしたので、次は日本語ではなく中国語で交流ができるよう頑張りたいと強く思った。

文：人間社会学域経済学類2年 久米 杏奈

渡航記3日目(2019年3月16日)後半

大連理工大学の学生と別れを告げ、日露戦争の激戦地となった旅順へと向かった。旅順は以前、軍事機密地域に指定されているため外国人立ち入り禁止されていたが、2009年より一部の地域を除き外国人に開放されるようになった。外国人観光客の9割が日本人客だそう。水師営会見所の中では当時の生活用品なども販売されていた。観光場所になってきているのだと思う一方で、ロシア軍が作った東鶏冠山堡壘の壁には日本軍が撃った銃痕が当時のまま残っており戦争の恐ろしさを感じた。また、二十八糎榴弾砲の巨大な大砲を見ると激しい戦いが行われていた様子が想像できた。203高地の頂上にある爾靈山の記念碑の前に、私たちは現在の戦争のない平和な日々感謝し、亡くなった多くの兵士の死を悼んだ。



夜には四大学懇親会が開かれた。海外で活躍されているOB・OGの方には中国でどのような経済戦略がとられており中国が今後どうなっていくのか、また学生時代にやっておくべきことなどを聞いて非常に参考になった。また、これから日本に留学しようとしている学生が日本語の勉強もして下手だと謙遜するのだが、皆上手に日本語を話す様子に非常に刺激を受けた。今回の大連の訪問では現地の中国人に多くの場面で助けられ、大連の人の優しさに触れた。現地の人の助けの大きさを感じ、彼らが日本に来たときには全力でサポートをしたいと思った。

会の最後に一人ずつ今回の研修のスピーチをした。本来会う機会がほとんどない私たちだったが3日間で親睦を深め、それぞれ研修で感じたことや考えたことについて話した。研修の目標としていたことを達成した人や今まで中国に対する見方が大きく変わった人もおり、1日目の自己紹介の時と比較して皆将来につながるような成長が遂げられたと感じた。



文：総合教育部文系後期一括 時野 加奈子